

## 第2節 特別な配慮を必要とする幼児への指導（特別支援教育）

障害のある幼児などへの指導に当たっては、集団の中で生活することを通して全体的な発達を促していくことを配慮し、特別支援学校などの助言又は援助を活用しつつ、個々の幼児の障害の状態などに応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとする。また、家庭、地域及び医療や福祉、保健等の業務を行う関係機関と連携を図り、長期的な視点で幼児への教育的支援を行うために、個別の教育支援計画を作成し活用することに努めるとともに、個々の幼児の実態を的確に把握し、個別の指導計画を作成し活用することに努めるものとする。 【幼稚園教育要領 第1章 第5の1】

障害のある幼児の指導に当たっては、園全体の協力体制を充実し、計画的、組織的に取り組むことが重要である。また、教職員が幼児に対する理解を深め、個に応じた様々な手立てを検討し、指導内容や指導方法の工夫を行っていくことが重要である。

ここでは、3年保育3歳児の事例を取り上げ、教職員が幼児の発達と障害への理解を深めながら支援する事例として、幼児が環境の変化に適応していく姿（事例1「すごいね できたね」）学級の友達と関わる姿（事例2「チューリップの歌で楽しいね」）、学級の中で自ら行動する姿（事例3「お砂場大好き」）を取り上げる。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）P105～P108）

### 1 幼児の実態

#### (1) 幼児の概要と園での姿

- ・ 3年保育3歳児クラス（20名）に所属する。
- ・ 父、母、姉、本人の4人家族である。
- ・ 手足の筋肉がまだ柔らかいため、歩行が不安定である。
- ・ 発語が少ないので表情や身振り手振りから、心情等を読み取る必要がある。
- ・ 言葉による指示が伝わりにくい。
- ・ 保育時間中は補助教員が付添い、支援している。
- ・ 外の遊具遊びに興味をもっている。

#### (2) 園における配慮事項

- ・ 疲れやすいため、保護者と相談しながら降園時刻を早めたり、行事や活動等の内容によっては参加を見合わせたりしている。
- ・ 周りの幼児が、適切な関わりができるよう、担任等が関わり方を示す。
- ・ 保護者の願いにより、友達と関わる場面を意図的に設定し、子供同士のコミュニケーションが行われるように図る。
- ・ 園で安心して生活できるよう、家庭で興味をもっている遊びに類似した遊びを用意する。
- ・ 次の日も遊びやすいよう、積み木等の遊具を遊びかけの状態にしておく。

#### (3) 専門機関との連携

- ・ 家庭、療育施設と連携し個別の教育支援計画を作成している。

- ・週に2日、療育施設に通っており幼稚園への登園は週に3日程度である。加えて他の療育施設にて月2日訓練を受けている。

## 2 指導のねらい

### (1) 指導の方針

障害の有無に関わらず、「自分とは違う」と感じた友達の特徴を尊重し、同じクラスの一員として共に遊び、時に見守り、必要な手助けをするなど優しい気持ちをもったクラスにしていきたい。また、保育者と共にクラス全員で、Aの成長を含め、自分たちの成長を感じさせ、年中クラスへの期待につなげたい。

また、保護者の願いである、クラスの友達との関わりを大切にし、クラスの全ての子供達が安心できる環境の下で、生活や遊びを共に楽しむことができるようにする。

### (2) 事例における指導のねらい

- ・新しい環境での生活の仕方を知り、園生活に慣れる（事例1）
- ・自分の身近な存在を意識する。（事例2）
- ・友達との関わりの楽しさ、一人（家族と）ではできない体験を楽しむ。（事例3）

## 3 内容

- ・朝の支度の仕方に慣れ、友達と一緒に進んで行く。（事例1）
- ・朝の活動に参加し、友達と活動を楽しむ。（事例2）
- ・砂場遊びを友達との関わりながら楽しむ。（事例3）

## 4 環境構成

- ・朝の支度等をスムーズに行うことができるよう、一人一人のマークを決め、それぞれのロッカー等にマークのシールを貼ったり、朝の支度の導線を工夫したりする。（事例1）
- ・互いの活動が見え、興味をもつことができるよう、座席の位置を工夫する。（事例2）
- ・朝の活動に、A児が好む歌や手遊びを多く取り入れるようにする。（事例2）
- ・A児がよく遊んでいる砂場に他の幼児も興味をもち、工夫して遊べるように道具を準備しておく。（事例3）

## 5 活動の展開と評価

### (1) 事例1 「すごいね できたね」 5月

A児については、朝の支度を教師と共に一つ一つ、繰り返し行っている。導線や表示の工夫によって、支援員と一緒にいけるようになってきている。

支援員「Aちゃん、タオルを掛けようね。」

支援員が手を添えると、A児はフックにタオルを掛ける。

担任は「上手にできたね、パチパチパチ。」と言いながら拍手をして、できた喜びを表現した。A児は嬉しそうな表情を見せる。

隣にいたB児が「すごいね。できたね。」と言い、教師と同じように拍手をする。A

児も笑顔で拍手をしている。

数日後、A児が登園すると、自らタオルを掛けに行く。

C児「Aちゃん、タオル掛けられたね。」

周りにいた幼児が拍手すると、A児も手を叩いている。

D児「Aちゃん、すごいね。」

C児「次はコップを出そうね。」

D児「あと、連絡帳はこっちだよ。」

A児はカバンからコップと連絡帳を出す。

C児「みんなで出しに行こう。」

数人の幼児がA児と一緒にコップと連絡帳を置きに行く。

教師「みんなも、朝のお支度ができるようになって、すごいね。」

D児「みんな、拍手だね」

みんなで拍手をして、喜んでいる。

### ○事例1に対する評価

周りの幼児がAを意識し、教師のAへの声掛けをはじめとしたやり取りの様子を模倣して関わったり、認める言葉掛けを行ったりすることで、Aと積極的に関わりをもとうとしてきた。

教師や支援員は、A児が一人でできること、教師が成長の段階を踏まえて支援を行ってできることを家庭と連携して把握し、褒めながらA児が自分で出来る喜びを味わえるよう支援した。

クラス全体では、自分の身の回りの生活に必要な活動を自分でする喜びを味わえるようにした。A児も友達存在を認め、園生活に慣れ、安心して生活していることが伺える。

### 事例2 「チューリップの歌で楽しいね」6月

A児やE児は朝の活動の時間は、保育室から出て、ベランダや外で遊んでいることが多く見られた。

6月に入って、E児は朝の活動に参加している他児を遠くから見るようになった。教師が少しずつ、声をかけると少しずつ活動に興味をもつ様子が見られ、徐々に活動に参加するようになる。

A児もまた、落ち着いて座っていることができる時間も長くなり、朝の活動の時間に保育室にいたことが多くなった。

朝の活動で、A児が興味を示しているチューリップの歌を歌う。A児が座ったままの様子を見て、隣にいたF児が声をかける。

F児「Aちゃん、手、チューリップだよ。」

他の子も加わり、両手でチューリップの花を作ってA児に見せる。E児もその輪に加わっている。A児も真似して両手でチューリップを作る。

F児「そうそう。チューリップのお花だよ。」

教師「Fちゃん、Aちゃん、きれいなチューリップありがとう。」

ピアノや歌のリズムに合わせてみんなで体を揺らす。A児も一緒に体を揺らして楽しんでいる。

F児「みんながチューリップになったね。」

G児「みんなきれいだね。」

教師「たくさんゆれていて、楽しそうね。」

これ以降、ピアノに合わせて自然に体を動かす様子が、A児やE児にも多く見られるようになった。

### ○事例2に対する評価

A児の好きな歌や手遊びをきっかけに、友達からの働き掛けや、友達が楽しそうに活動に参加している姿に刺激を受けたものと思われる。また、活動に参加することで、共に活動する楽しさを感じ、更に活動が広がっている。

この時期になると、A児は友達の行動にも興味を示すようになり、楽しそうな友達の姿を真似て行動できることが少しずつ増えてきている。支援員と担任は、指導の方向性を共有し、見守ること、支援することを共通理解している。

また、教師が幼児一人一人に声をかけ、よさを認めることによって、F児のように、友達の様子に気付き、一緒に楽しもうとする意欲が育っている。

### 事例3 「お砂場大好き」 10月

A児は支援員に見守られながら、一人で砂場遊びをする姿が多く見られる。砂場で遊んでいたH児らが、A児に気付く。

H児「Aちゃん何作ってるの。」

支援員「何だろうね。」

A児はコップに砂を入れている。その近くで、H児が砂で山を作り始める。

H児「Aちゃん、見て！お山だよ！」

H児が山を作りA児に見せる。A児はその山を見て、手で崩してしまう。

支援員「壊れちゃったね。」

H児「壊れちゃったね。また作るね。」

H児が再び山を作り始める。A児はその様子を見ている。

山が出来上がると、A児が崩す。

H児「Aちゃん、ちょっと待っててね。」

H児が小さな山を作り、出来上がるとA児が崩す作業が繰り返される。

担任が来て声を掛ける。

担任「Aちゃん、楽しそうだね。」

H児「Aちゃん、笑ってるね。」

担任「Hちゃん、大変じゃない？」

H児「楽しいよ。」

また、H児は山を作っている。

### ○事例3に対する評価

A児は支援員の見守りで、安心して砂場で遊ぶ様子が見られる。クラスの幼児が、A児の活動に無理に関わるのではなく、自然に遊びの輪に入れて遊ぶ様子から、日常

重視すべき項目を視点とした実践

第2章-B 第2節 特別な配慮を必要とする幼児への指導 p.5

の教師の関わり方が影響を与え、互いを尊重する土壌が育っていると考えられる。また、A児を受け入れA児に合った遊びを共に楽しむ様子が伺える。

## 6 評価を踏まえた指導計画の改善

本事例では、特別な支援を必要とする幼児への、保育者の言葉掛けや関わり方を見て、周りの幼児が真似をして幼児と関わりをもつようになっていった。保育者の行動が周りの幼児に影響を与えていることを自覚し、保育者や療育機関と情報の交換や共有をしていくことで適切な指導や援助のあり方を考えていくことが望まれる。

幼児は周りから自身の行動を認められることで喜びを感じ、更なる行動へと移すことが出来る。一方、場合によっては、行っている行動を止められると、強い拒絶を見せることがある。物事の良し悪しや集団生活のルール等を伝えていく上で難しい部分であるが、幼児の思いを大切にしながら、家庭と連携して少しずつ支援していきたい。